

人と人をむすぶ

片岡 靈恵

今年度最終号のテーマとうかがったので、はじめは「むすぶ」という言葉の意味を、結末とだけ考えていましたが、あとで「むすぶ」には、もっと違う意味や使い方があることに気づきました。自動詞としては「露をむすぶ」とか、他動詞としては、「つなぎあわせる」「約束する」など。また名詞としての「むすび」は、リボンむすび、蝶むすびのように、糸や布に関連しています。が、「おむすび」という調理法にも使われています。アツアツのご飯に梅干いりのおむすびの魅力、帯をむすんだ和服の美しき、ネクタイやネックチーフのアクセント効果を考えても、結ぶことによって、何か新しい創造があるようです。

多田道太郎氏が「しぐさの日本文化」^{注1}の最終章「むすぶ」のなかで、「紐と紐をむすび、米粒をむすび、手と手をむすぶ」という作業をしてゆくうちに、心と心のつながりをつくってゆく」とい

っておられますが、人と人をむすぶものは一体何でしょうか。日頃、私は保育内容「社会」の研究演習で、かなり多くの時間を、人間関係や集団形成の問題についてやし、若い人たちと考えあっている、このテーマを、人と人をむすぶ視点から再考してみたいと思います。

保育の場では、まず先生と子どもを「むすぶ」ことが考えられます。先生と一人一人の子どもの間に、それぞれのつながり関係がつけられなければなりません。津守、本田、松井氏らは、よい保育者と子どもは、まるで「見えない糸」でつながっているようだ^{注2}と表現しておられます。すばらしい比喩だなと感心していました時、次のような学生のレポートに出あい、新しい発見をしました。

A子（三歳）は一人で壁ぎわに坐り、ブロックをほとんど全部自分のまわりに集め、その外側を大きな積木でかこんで、誰も中に入れないようにしている。K（三歳男）は、別の所でブロック遊びをしていたが、飛行機に使う細長い形のブロックが全くなのけて中に入り、ブロックを乱暴につかみ出した。A子は「あかん、勝手にとったら！」と大声で言いながら、ブロックを集めよ

うとしている。

私(実習生)はそばに近寄り、まずKに「Kちゃん、だまってもっていったらだめよ。貸してほしい時は何ていうんだったかな？」と言ってみた。Kは少しはすかしそうにして「かして」と小声でいった。「そうね、貸してほしい時はそういうのよ」と私。A子に対しては、「Aちゃん、そんなに沢山あるんだから、Kちゃんにも貸してあげてよ。皆で使って皆で遊びましょね」というと、A子は、案外すなおに「うん」といって、私にブロックを少しさし出した。私はそれをKにわたした。

(平安女学院短大二年 牛田美子)

この指導は、表面的には成功であり、AとKは、けんかせずそれぞれ満足したのですが、彼女は、次のように考察しています。

「この時、私は、先生という立場にある者が子どもの中に入る方法について考えた。私はAとKの接触が、あとあとまでうまくいくきっかけをつくってあげたつもりなのだが、結果的には、Aと私、私とKとのつながりが出来ただけで、AとKの間には、別によい関係がなかったし、結ばれなかったような気がする」

この考察は、短大二年学生にしては、深くするどいと思われますし、クラスで討議してみたいと思いますが、私の考えをま

とめてみましょう。

「見えない糸」を拝借させていただきましたと、A児とK児との間の糸は、先生というむすび目でつながっているといえないでしょうか。はじめは結び目は目立っていますが、段々に、小さくなりわからなくなるでしょう。そしてやがて、二人は、先生の介入や仲介なしで友だちになってゆくと考えられます。このように、保育ーことに集団保育の場では、先生と子どもとのつながりと同じ位大切なことに、子ども同士の関係があります。私たちはこれを百も承知なのですが、ともすれば、見落すことが多いのではないのでしょうか。しかし、いつも、大人が子ども同士を結びつける役目を果さなければならぬとは限りません。この場合でも、ほうっておけば、AとKはけんかをするでしょうが、そのあとで二人がブロックを分けあうことや、一緒に遊ぶことを考え出したなら、二人の間は、結び目なしの糸でむすばれるのです。

人と人がむすばれるということは、すばらしい創造的な「わざ」であると思います。私のすぎな祈りの一節に「われらに、うるわしき徳の衣をまとわせ、愛の帯をもってむすび」とありますが、私たちの人間関係が、愛によって結ばれることを心から願うこの頃です。

注1、多田道太郎著「しぐさの日本文化」 筑摩書房

注2、津守真、本田和子、松井とし共著「人間現象としての保育

研究」I 光生館 (平安女子短期大学)

むすぶ

——そのもどかしさ——

早川満寿子

大勢の子どもたちが、足どりも軽く登園して来ます。その中にたまに一人位、ひものついた靴を履いて来る子どもがいます。きちんとひもが結んであって軽そうなのその運動靴は、脱ぐ時はいいのですが、帰りに履く時が大変です。ひもをほどく、下の布を引っぱる。両方のひもをぎゅっと持つ。早くお友だちと帰りたいのになかなか結べない。結んだつもりでも手を離すと左右がばらばらになる。なかなか結べない。「もどかしさ」を教師も共有する。教師の手を借りてやっと結んでもらう。ああよかった。思わずに

こにこする。けれどもこのひも靴は、足元がしまって歩きやすいのです。

我が家の二年生になる息子が、秋の運動会には走りやすいひも靴をどうしても履くといいはり、とうとう買わされました。よし、これで頑張るぞと、当日迄、それを履いて通学しました。玄関で身をかがめて左右のひもをきゅっと引っぱり、いつの間に来る様になったのかきちんと結んでいます。私もこの子が小さかった頃、一足のひも靴を求めたことがありました。しかし、普通の運動靴なら自分で履けるのに、ひも靴の時は親が必ず手を貸さねば駄目で、もうひも靴は買うまいと思ったことでした。でも子どもはその靴を履きたがりました。歩きやすかったのか、それとも履く時に親がちょっと手を触れて履かせてくれるのがうれしかったのか——でも今は、さっさと一人でひもを結んで学校へと飛び出して行ってしまふようになりました。

幼稚園の庭では、まぶしい陽をあびながら先生がまわしてくれる長い縄を、歌に合わせて飛んでいます。「大波小波でぐるりとまわって猫の目」歌の後も一、二、三、四……といつ終るかと思われる程、長く長く飛んでいる子ども。「大波小!!」で縄が足にかかり、終ってしまう子ども。次々と順に飛んではまた列の後につながって、男の子も女の子も今度こそはと順番を待って飛び続